

キリスト教教育に於ける教師の權威について

鄭 泉 聲

目 次

序

- I. キリスト教教育に於ける教師の教師資格
- II. キリスト教教育に於ける聖書解釈と教師の信仰
- III. キリスト教教育の主体なる教会に立つ教師の責任
- IV. 説教者としてのキリスト教教育の教師の權威
- V. イエスの教師的權威から見たキリスト教教育の教師の權威

結 語

註

参考文献

序

キリスト教教育は、単なる教授法とか管理法などのような技術論だけで解決がつくことではない。それはむしろ、教授法とか管理法とかそういう技術論以前の事である。キリスト教教育とは、キリスト教教育そのものの目的から出発し、そしてその目的に帰着しなくてはならないものである。何故なら、キリスト教教育はその本来の目的を達成するために実行されるものであって、それ以外の何ものでもないからである。1971年に制定された日本基督教団の教会教育の目標は、「神から委託された宣教のわざとして、教会が人びとを、キリスト者の交わりへと招き入れ、彼らがイエスを主と告白し、生活の全領域で隣人とともに生きるものとなるように育てることである。この働きによって、人びとは、主イエス・キリストに出会い、神の恵みを知り、感謝をもって主に服従し、この世における神のみ業に参与する者として、生涯にわたって成長しつづけるのである。」とある。ミラー (Randorf C. Miller) は、「キリスト教教育の目的は、各個人がキリスト者として生きる決断をするように導くことである。」と言った。^(註1) 又ワイコフ (D. Campbell Wyck-off) はもっと端的に、「キリスト教教育とはクリスチャン生活を養育するものである。」と言った。^(註2) 以上キリスト教教育の目的に関する定義の二三の事例から見るとあきらかであるように、キリスト教教育とは、キリスト教的人間形成である。これを日本基督教団教育委員会は、その発行した「教会学校教師ハンドブック」の中で、「まず教育というとき、教会の本質的使命たる宣教——神の言の伝達に従事することを意味する。しかしこの伝達の仕方はいわゆる伝道という方法とは異なるもので、次に述べる諸性格を持った伝達の仕方をするものである。すなわち神の言の伝達だけに終らず、その伝達したものが相手方の人間の中に受け止められて、

それが育ち、一個のキリスト者としての人間形成をするまでのいっさいの過程を配慮の下に置く。」

(註3) と説明している。以上のような定義と説明が受け入れられるならば、キリスト教教育の教師たちは途方もない極めて困難な仕事にたずさわっていることになるのは必至である。それ故に、キリスト教教育とは、カリキュラムの問題とか、教学法の優劣などを思考するよりはむしろ教師の師質を問うことが何より大切であることは言を待たない。この意味に於いて、キリスト教教育とは教師論に尽きると言っても過言ではないのである。言い換えると、キリスト教教育の教師は、キリスト教教育の成否のかぎを握る最も影響力のある人物であるということになる。然らば教師たちが一番頭の中に入れておかななくてはならないのは一体何であろう？すぐれた教材か？それともすばらしい教授法なのか？1920年代に教会学校の科別教案が出ると、教師の訓練が一段と系統的になった。国際宗教教育協議会 (The International Council of Religious Education) は教師養成規程を制定して、聖書・神学・教学法などのコースを研習したものに教師適任証を発行したが、間もなくこの計画は取り止めになった。取り止めになった理由は、事務局の事務処理の難しさもさることながら、大方の理由は、この研習コースによって教師の進歩が保障されなかったからである。(註4) 日本基督教団教育委員会も、1949年に速成コース50時間、標準コース120時間というキリスト教教育教師の養成規程が設けられ、その後50時間はすこし少なすぎるし、120時間はなかなか単位をとりきれないという実情を見て、1952年3月に新しく70時間35単位の規程が設定された。又遠隔の地にある人で講習会に出られないような人のために、通信講座まで設けて単位修得の道が開かれたが、この努力は長く続かなかったようだ。ほとんどが平信徒である教師たちにとって、全単位を修得するのはそう簡単なことではないということは想像に難くない。

このように、途方もなく極めて困難な仕事、つまり一人の人をしてキリスト者としての人間形成をするまでのいっさいの過程にたずさわるキリスト教教育の教師たち、しかもほとんどが平信徒であるということ、その責任の重かつ大なることを知りつつも力及ばずながらキリスト教教育にたずさわらせている人たちには一体教師としての権威というものがあるだろうか？マタイによる福音書の記者は、「イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた。それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。」(マタイによる福音書7:28~29) と特にイエスの教師としての権威について註釈している。権威ある教師としてのイエス・キリストを前にして、キリスト教教育の教師は一体どういう立場に立たされているのか？又どういうロールプレイをすべきか？権威があるのか？あるとしたらどういう権威なのか？これらのことがらは、新たな検討が要求されなければならないように思う。

1. キリスト教教育に於ける教師の教師資格

復活したイエス・キリストは昇天されるとき、弟子たちに「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるの

である。」と言われた。(マタイによる福音書28:18~20) イエス・キリストがその弟子たちに言われたと言うことは、取りもなおさず、すべてのクリスチャンに対して言われた言葉であると解釈される。それ故にクリスチャンは、イエス・キリストの命ぜられたいっさいのことを皆のものが守るように教えなければならない。これはあくまでイエス・キリストの命令であって避けて通れない使命である。パウロはこのことを身をもって感じ、「わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇にはならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えないうら、わたしはわざわいである。(コリント人への第1の手紙9:16) と言った。確かにクリスチャンには、それぞれキリストの福音を伝え、皆がその福音に聞き従うようにしなければならない責任を負わされている。しかし又同時に、そういう重い責任を感じたパウロは「わたしは罪人のかしらなのである。」(テモテ第1の手紙1:15) と言って卒直なためらいを感じたのである。ヤコブはその手紙の中で、「あなたがたのうち多くの者は、教師にならないがよい。わたしたち教師が、他の人たちよりも、もっときびしいさばきを受けることがよくわかっているからである。」

(ヤコブの手紙3:1) と注意している。こうなると、聖書にはあたかも相矛盾していることが語られているように聞えるが、実は相矛盾したことなく、むしろキリスト教教育の教師に欠かさない二つの要素が言われているのである。それは、自分が教師と呼ばれるに値しないと言う深い反省による謙虚さを持つと同時に、生涯をささげなくてはならないというイエス・キリストの召命に応える召命感に熱心でなければならないということである。イエス・キリストを通して神から命ぜられ、遣わされたものであるが故に、極めて資格がない者であると知りつつも、この仕事にたずさわらずにはおれないというものがキリスト教教育の教師であるということである。

さて、イエス・キリストが命ぜられたいっさいのことを守るように教えると言うことは、又同時に、ただ謙虚で召命に生きているだけでよいということではない。それは、自づからこの命令を完遂できるような素質が必要であり、努力が要求される。ミラー (Randolph C. Miller) は「教会の指導者や教師の仕事をするには特種な資格条件が求められている。そのなかには言葉と行動によって福音を伝える能力、諸関係を通してキリスト者の生活の豊かさを分かち会える能力、教会のグループが福音のチャレンジに応答するように刺激するような素質、自分が責任を負う人々に対して、神の恵みのチャンネルとなることができるような人間であるということが含まれている。」(註5) と言っている。こうなると、普通の人にはとてもキリスト教教育の教師にはなれない。その資格と言い、その素質と言い、人間的に言って到底不可能だと言わざるを得ない。このように目に見えて到底不可能な人間を何故神は召されてその命ぜられたいっさいのことを守るよう教えると命ぜられたのか？われわれは、この問題を更に考えねばならない。つまり、罪人である人間になぜ神がこのような重い責任を負わせたかということである。バルトによれば、ローマ書に於いて、パウロは人間の実存は罪であると同時に、イエス・キリストの贖いに基づく神の恵みでもあると解く。山内一郎は、「今や彼岸が此岸に関与し、罪責の此岸が恩恵の彼岸に関与せしめられるというしかたで、神の恩恵がわれわれを攻め立てている。恩恵とは、神が人間と関係されることであり、けっして人間がある事をなしうるとか、なすべきではないとかいうことでもな

い。すなわち、神が人間の罪を赦し、実存の全体を引きうけ、かつそれを要求するということであり、福音はわれわれの実存に対する根源的な問いであると同時に答えでもある。このように実存のもつ問題性を新しい可能性へと転換する真の福音（イエス・キリスト）が正しく宣明され、人間がこれを正しく聞き、自分のものとして受容することによって、彼が神の恩恵に対する新しい服従と答責の現実を生きるようになること、すなわち荒野に立つ罪ある教師の実存がそのままキリストに於ける神の恩恵を発現する生ける媒体として肯定的に意義づけられるという。」(註6)と説明している。

さらに人間の本質の問題について考えると、人間とはそもそも何々であるという人間論的命題の述語部分を、イエス・キリストはこれこれの人間であるというキリスト論的命題の述語部分から認識することができる。(註7) と言うことは、われわれはイエス・キリストの人間性に於いて、われわれの存在の永遠的根拠を見出すことができる。それはわれわれが、キリストによって義とされ自由にされた人間として、真の、全き、恵みによって祝福された人間性になったことである。即ち人間の人間的本性は、イエス・キリストの人間的本性に類比的なものであり、人間は今や、神の恵みによって神の恵みの容体であり、神の恵みを受けとめる主体となったのである。したがって「われわれに於ける人間一般は、全く墮落し、倒錯し、腐敗したものであるが、しかしまた、ただひとえにイエスの人間的本性において全く救われ、保持され、継続されたものであると述べることができる。われわれはこのような人間性一般を、その真理性において、ないしは可能性において叙述することができる。この場合に、イエスにおいて保持され、保存され、容体的に実現されたところの人間の本性は、われわれの主体的存在の実現の可能性の容体的な保証である。」(註8)と上田光正は書いている。したがって、イエスにおける人間存在の規定をそのまま人間存在一般に適用することは適當ではない。なぜなら、「われわれにおけるわれわれ自身の存在は、イエス・キリストのペルソナによって媒介せしめられたものであり、……すなわち人間の存在論的規定は、イエス以外のあらゆる人間の真中に、イエスというひとりの人がいるということの中に基礎づけられている。……それゆえ、現実の人間の存在とは、バルトによれば、神と共なる存在である。これが人間の根本規定とされる。」(註9)

以上から見て、われわれは、イエス・キリストの形成のうちに人間形成の可能性を認めるのである。即ち、人間形成に関し、われわれは、人間の側からのみ企てられる人間形成を否定するが、イエス・キリストに於て企てられる人間形成に対して肯定する。言い換えれば、人間の側のみに於いて企てられる教育は否定されるが、イエス・キリストを教育の主体とし、人間が神の恵みに対する奉仕としての教育の業は肯定されるのである。言わば、神がその恵みにおいて人間を選び、神を代表させることを備えさせた故に、キリスト教教育の教師として資格が与えられ、権威が与えられたのである。ただし、この資格と権威は、人間が正に絶対者なる神の恵みによって選ばれ遣わされた代表として存在することによるものであり、この権威の行使は決して存立せんがためではなく、現に存立させられていることにある。したがって神を畏れつつその命ぜられたことを遂行することによって、神の奇跡があらわれるような権威であると言ってよい。こうなると、キ

リスト教教育とは、神の恵みと、その恵みに対する応答としての教育である。神が人間を愛するのに対して、人間が神を愛しかえす行為とも言えよう。ここにキリスト教教育の教師の役割が見出され、教師としての権威の出所がわかるのである。しかし、このようなキリスト教教育の教師は、もはや完全に神に属するものではない。神とキリストとの支配下にあつて、自分自身に生きず、キリストにあつて生活続けるものであるが、^(註10) 他面、彼は地上の生活を止めたのではなく、一般の人と変りはない。^(註11) いわば、彼はキリストを信じつつ地上にあつて肉にある生活をしているのである。これでこそキリスト教教育に於ける教育者及び被教育者という「教育」なるものが可能となり、教師の権威の本質的限界なるものが明らかとなる。

さてこのように考えてくると、一体キリスト教教育に於ける教師の役割とは何かが問題になってくる。ブルナーは人間は神とともにある時初めて本当の人間であると言い、神から離反することとして罪とは本当の人間存在の喪失であり、神の像の破壊である。つまり、人間の心がもはや神の愛を反射しないで、自分自身を反射する時は人間は神の像を持っていないという。^(註12) 人間はそれ故に神の像として神を反射することが責任であり応答でもある。キリスト教教育の教師は自分自身を反射するために召されたものではない。これは又別の現わしかたで言うと、神の愛のチャンネルとなるということである。「信仰は人が聖霊の交わりの中で、神の愛に応答する際、神の恵みによって創られるものである。人がなし得るすべてのことは、パウロとアポロは植え、水を注ぐことができたとしても、みのり豊かにされるのは、いつも神ご自身であるということを常に心得ながら、彼らの使えるすべての技術と道具を用いて、恵みのあふれ出るような雰囲気を提供することである。恵みによる成長は、決して教育的手続きではなく、常に全能なる神の神秘的な摂理によるのである。キリスト者の信仰の成熟における人格の統合は、授業や指導性の技術によって達成されるものではなく、常に信徒の共同体の中で、神との人格的關係の結果として出て来るのである。」^(註13) とミラー (Randolph C. Miller) が言ったが、誠に當を得たものであると言えよう。

又すでに述べたように、キリスト者とは、神の恵みによる赦しの事実を受け入れたものである。そして、神の恵みによって、ふさわしくないままに神の家族のなかに入れられたことを深く自覚しているのである。このような自覚を持った人がキリスト教教育の教師として召されたからには、キリスト教教育のはたらきが、たんに教師が学んだ聖書の知識を学習者に教えこむことで終るのではないことを知らなければならない。むしろ学習者と共に聖書の真理の探求に出て行くことを可能ならしめ、これを促がす働きがキリスト教教育である。「福音が教師を選び、これを召し出し、これを支配するのである。福音のことばは、教師にとって、けっして完結せる自明の真理ではない。それ故に教師も、たえず福音に聞き、学びつづけるのである。このように、自身の悲境や有限性や罪を自覚することのできる教師こそ、つねに生徒と共に神の前に立ちうるものである。……したがって、教師は、あるときは謙虚に、またあるときは大胆に教えるものである。彼は自分がほんとうにつかんだことだけを語る。」^(註14) とヘンダーライト (Rachel Henderlite) は言っているが、これが神に選ばれた福音の使者としてのキリスト教教育にたずさわる教師のあるべき

姿であると思う。

II. キリスト教教育に於ける聖書解釈と教師の信仰

聖書はキリスト教教育に於ける教科書であり、教師は聖書の解釈者であることは疑いのない事実であるが、問題は、キリスト教教育の教師が聖書をどう解釈するかによって、キリスト教教育の本質が問われ、教師の位置が問題となり、そしてひいては、教師の教師としての権威如何に関連してくる。

聖書に現われる神は人間に向って語る神である。人間と人格関係を持ちたい神が人間を招き語ったということである。そしてこのような神と人との対話は、イエス・キリストに於いてまとめられた。あたかも「神は、むかしは預言者たちにより、いろいろな時にいろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によってわたしたちに語られたのである。……御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿である……。」(ヘブル人への手紙 1:1~3)とあるとおりである。このような神の絶えざる語りかけをないがしろにしては、聖書の解釈は不可能であると言わねばならない。ブルトマン (R. Bultmann) は、聖書の非神話化という方法によって、近代人が聖書の本質を理解できるよう志ざしたのだが、クレーマー (Hendrik Kraemer) は、「ブルトマンは福音の本質を実存主義者のいう自己理解にまで後退させている。そこではキリスト教の固有性が色あせて、自己理解が十字架という裁きの座に先立って生起するのである。」と指摘している。^(註15) 又シュライエルマッハー (F. E. D. Schleiermacher) によると、イエス・キリストは偉大な教師であり、われわれはキリストに導かれてキリスト教信仰に入る。言わばイエス・キリストは人間に宗教的感化を与える教師にすぎない。このように取ると、キリスト教教育は一種の道德感化教育になり、聖書は道德の教科書にすぎなくなる。このように聖書解釈上決定的な問題は、聖書を聖書本来のあり方から全くかけ離れた認識を試みる傾向を持つか否かである。ヘンダーライト (R. Henderlite) は、「聖書の物語は、単なる過去の出来事の記録以上のものである。すなわち、イスラエルの人びとが燃えるような熱心さで、彼らの子供たちにこの物語を語り伝え、神の民としての彼らの存在そのものが、これらの出来事に根拠づけられていることを自覚したとき、そこに神と民との出会いがそのつど現実に生起したのである。」^(註16) と書いている。確かに聖書は神がその民に語りかけられた記録である。生ける主なる神が如何にその民に自ら語り、又その民が如何にその神に答えたかを記した書物である。故にこうした神とその民との対話の生活との関連に於いてのみ始めて聖書の意味がわかり、解釈ができ、伝達が可能となる。ただ単に聖書の文献上や言語上の興味にひかれて思弁をもてあそび、或はいわゆる金言を暗記するのみで終るのではなく、神がわれわれに対して、どのような生きかたを要求し、そして現にどう働きかけておられるかをまず知らなければならない。かくして、キリスト教教育に於いて、教師は教材や教学法にのみ頭を痛め精を出すことが本分ではなく、むしろキリスト教教育の教師にとって最も重要なことは、教材や教学法を考える以前のことであり、聖書に記されている神とその民との対話の関係を理解し、そして自からそのような関係に入るとき、始めて聖書の

聖書たるゆえんを知り、神の恵みをつかむことができるのである。それ故、キリスト教教育に於いて、最も力強く頼りになる教学法とは、聖書の神との出会いの関係を知り、その出会いの生活に参与し、その生活を通してキリスト者とは何者か、キリスト教的価値とは何かを学生が自から体得できるようにすることである。

さて、聖書に記されている神とその民との対話の关系到自から入ることによって始めて真の聖書理解ができ、聖書解釈ができると述べたが、昔神の民はその時代に対する神の言を聖書の中に聞いたのだから、今日の時代に対する神の言は、今日の神の民つまり教会が聖書の中に読まなければならない。つまり、われわれは聖書をとおして、神が今ここでわれわれとの関係において何を語られているかを知り、そして決断をしなくてはならない。又イエス・キリストは単に歴史的事実ではなく、事実と信仰との結びついている出来事であり、われわれがイエス・キリストに結びつくことによって救われ生れ変わる (New Being) ののである。この救われ生れ変わったものとしてのわれわれは、イエス・キリストを主と告白するのみならず、主が今日われわれに要求されているいろいろな責任を遂行しなくてはならない。しかもその責任を遂行しなければならない所は現実世界であり、人類の文化である。故に、現代の神の民はこれら現実世界と文化から離れては自からの責任を果し得ず、むしろそれらとの生きた対話関係の中でなされねばならない。キリスト教教育の教師は神の民の一分子として、その責任を負わされているのであり、こういう意味での聖書解釈が要求されているのである。

さらに、われわれは神が今でも引き続き世を贖われる仕事をなされていることと関連して考えなければならない。キリスト教教育は、或る意味に於いて神の世を贖われる仕事にたずさわることである。それ故われわれの焦点は神が現在何をしておられるかであり、われわれが主体的に何をしようとしているかではない。むしろわれわれのとるべき姿勢というものは、この現在も引き続き何かしておられる神に答えられるような人をつくることである。この意味に於いて、「聖書は、神が過去になされたみわざを証しするとともに、またそれを通して神の言がくり返し到来し、きくものを彼の民として召し出す媒体・通路である。」^(註17) 又「教会は聖書という容器・道具を用いて、神が今も変わらず働き、神と共に生きる民を新たに創造しておられることを知っている。聖書に記録されている数多くの出来事は、ひとたび起り、永久に過ぎさってしまった客観的な出来事ではない。そうではなくて、これらの出来事は現に生起しつづけている物語の一部であって、その終結はなお将来に属するものなのである。それゆえ、人はこの物語にきくたびに、そこで人間の魂を求めてやまない神の生ける言の現実にあふれるであろう。」^(註18) このように聖書は、「決して聞くものの理解力に向ってではなく、彼らの信仰に向って訴えられる。……つまり神がその心を啓示したのに対して、彼らもまた心を開いてこれに服従するのが、この使信に対する正しい応答の仕方である。」とクレマー (Hendrik Kraemer) が言ったとおりである。^(註19) このように考えてくると、一つの大事なことが浮き彫りにされたことになる。それは筆者がすでに「キリスト教教育の主体性について」^(註20) の中に於いて述べたことであるが、一般的に教育の方法を考えると、われわれはすぐ何 (what) をどう (how) コミュニケートするかをまず考えるが、事キリスト教

教育に関しては、そうではなくて、誰（who）がコミュニケーションするかを先に考えるということである。何しろ、すでに述べたように、キリスト教教育の教科書である聖書は、神が過去になされたみ業を証しし、又それを通して神の言がくり返し到来し、また聞くものを彼の民として召し出す媒体であり通路であり、きくものの信仰に向って訴えられるものであるから、ただ単に誰かに聖書のこういう内容（Subject Matter）を話して終るのではなく、根本的にこのような聖書のユニークな本質を実現可能にする人は誰であるかが最大な問題となるわけである。キリスト教教育の教師は、果してこのような可能性を持った人なのか、言い換えれば、キリスト教教育の教師は聖書の予期する信仰の持ち主なのかを根本的質問である。パウロが、「わたしたちはこのキリストを宣べ伝え、知恵をつくしてすべての人を訓戒し、また、すべての人を教えている。……わたしはこのために、わたしのうちに力強く働いておられる方の力により、苦闘しながら努力しているのである。」（コロサイ人への手紙 1：28～29）と言っているように、人間の努力もさることながら、根本的には「わたしのうちに力強く働いておられる方の力により」というパウロ自身の告白から見て、パウロは福音の宣教や教育にたずさわるものとして、あくまで神が主権者であり、自分が神の内に包まれてのわざであることを知らされるのである。これはつまり、キリスト教教育の中心は人間ではなく、神であり、神に自からを委ねたものの従事するわざであると言ってよい。故に、キリスト教教育に於いては、教師の信仰がカリキュラムや聖書の題材（Subject Matter）に優先する。エドワード・エバディング（E. Edward Everding, Jr.）は、キリスト教教育に於いては、教師は①学生達に聖書をどう読むかを教える ②聖書の意味を発見させる ③その聖書の意味が自分とどういう関連があるかを知るように輔ける責任を持っている、と書いている。（註21）このような責任を持つ教師として、当然その教学法は、告白的スタイルのものであり、そして教師自身の聖書に対する信仰基準が問われるとエドワード・エバディングは結んでいる。

このように、聖書の解釈には信仰が優先すると述べてきたが、その際、われわれは聖霊の働きを忘れてはならない。聖霊の導きなしには、人間は聖書を読んでも、聖書の主人公に正しい応答ができかねるからである。つまり人間が福音を信じられるのは、聖霊がかれらの心の内に働いて信仰を生起せしめることによるのである。又同時に、この聖霊の働きによって信仰を生起せしめられた人を通して他の者に働くのである。キリスト教教育の教師とは、心の内に聖霊が働いて信仰を生起せしめられたものであり、この人たちを通して学生たちに神の力が働くのである。言い換えると、教師というものは神に召されて神の御用に供するものである。こういう観点から見て、キリスト教教育の教師は聖霊の器とならない限り、かれらには何ら力がなく、ましてや権威というものがあろうはずがない。「キリスト教教育とは、こういう意味で、真の教師は神であり、神の霊であって、人間ではない。人間は自からを教育することも他人を教育することもできない。人間が教育者となるためには、まず神によって新しく造り変えられ、罪の支配から脱して霊の支配下に立つ者とならねばならない。」と小林公一が書いている通りである。（註22）こうなると、キリスト教教育の内容も当然神に教えられたものであり、それを実現する力も神から与えられることになり、教師としての資格も、信仰によって、神より与えられることになる。故に、もしキリス

ト教教育の教師に権威があるとすれば、それは言わば神から霊を与えられた人に附随する権威であり、他動的権威であると言えよう。イエス・キリストは、「わたしは天においても、地においても、いっさいの権威を授けられた。それ故にあなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」

(マタイによる福音書28：19～20) と変えることのできない命令を下されたが、これは、キリスト教教育というのは、イエス・キリストのみ教えを、イエス・キリストの方法で行うと言うことにも解釈できる。われわれは聖霊がどのように働くかを見きわめて、神と共に働かなければならない。ロイス E. ルバー (Lois E. Lebar) は次のように言っている。(註23)

聖霊が任命されるのはプログラムではなく、聖霊と共にプログラムを計画できる神の人びと。

聖霊が降るのは方法の上ではなく、聖霊がその人を通してみ心のままに働ける祈りの人びと。

聖霊が流れるのは組織の中ではなく、聖霊と共に組織の中で働ける力のある人びと。

プログラム、方法、組織は目的ではなく、

目的のための手段。

目立たぬ時にこそ効果がある。

何をなすにも、考慮すべき重大事は、人々に何が起っているか。

Ⅲ. キリスト教教育の主体なる教会に立つ教師の責任

教会がキリスト教教育の主体であり、教会を理解するには、神の救いのできごとに立ち返ることによって始まるということは、筆者がすでに前に述べた。(註24) 即ち、旧約聖書のイスラエルは新約聖書のキリスト教会の原型であり、神の選民の旧約的ありかたが、イスラエルと呼ばれるものであり、その新約的ありかたが教会である。そして、このような神の選民のありかたが、神の民共同体として生かされ養育されたのである。故に、われわれがキリスト教教育という責任を背負って実行に移すとき、根本的に大事なことは、われわれは果してこのような神の民共同体の中にあるかどうか、又その共同体の質が変わってしまっていないかをたえず確めなければならない。言い換えれば、われわれの救いを可能にしたのは、あくまで神の民共同体に対する神の恵みなのであるから、この救いの恵みに対し、神の民共同体の中で、信仰をもって応答して行かなくてはならないと言うことである。しかもこの応答を可能にするのは、あくまでイエス・キリストを通してあらわされた神である。言わば、神がわれわれの応答を可能にする主体でおられる。キリスト教教育はこのような神の恵みに応答できるよう導くわざであるから、当然その主体は神である。そしてこの神は、今もなおイエス・キリストを教会（神の民共同体）のかしらとして臨在させておられる。故に教会はそのかしらなるイエス・キリストの命令に従ってキリスト教教育の責任を

遂行しなければならない。言い換えると、教会はキリスト教教育の主体である。

さて、キリスト教教育を実施する場合、教会即ち神の民共同体の質が変わってしまっているといけない、何故ならわれわれの救いを可能にしたのはあくまでこの神の民共同体に対する神の恵みなのであるから、又この神の恵みに答えるには、神の民共同体のわくぐみの中で信仰でもってするものであるからと述べたが、こうなると、教会即ち神の民共同体の生活そのものが、この神の恵みの真理を伝達する媒体であり通路であると言わねばならない。即ち、教会の礼拝と生活を通して、神の民の信仰が具現され、成長し、言わば神の民が神の民共同体の中で、神と出会い、永遠の生命を見出すと言うことである。このようなわざに従事するものとして、キリスト教教育の教師は、この神の民共同体のこうした機能を忘れてはならない。否、むしろキリスト教教育の教師とは、この神の民共同体の中であって神のみ業に奉仕するものである。教会を基盤にしないキリスト教教育の教師はありえない。さらに言うならば、神の民共同体の中であって神のみ業に奉仕するものとしての教師は、神の民共同体の唯一のつとめが、神の恵みに仕えること以外にはないということを知らなければならないということである。ヘンダーライト (R. Henderlite) はこれを「恩恵のつとめ」と言っているが、^(註25) われわれはただ単に聖書を解釈し、福音の事実を学生に伝達したとしても、もし学生の魂が神の恵みに触れて変革されないならば何の益にもならない。キリスト教教育の教師は、教会が知っている神の恵みの事実を伝達すると同時に、教会が体験しているこの恵みの光を、生活を通して、具体的に人々に向って反射させねばならない。しかしこのようなことは、いわゆる一般的に言う教育とか又はコミュニケーションとかによってなし遂げられるものではないことは明らかである。何故なら、今日われわれは、虚無な人類社会の現状に対して立ち上らなければならないが、「このように立ち上って行く存在の勇氣こそ、キリストとしてのイエスにおいてあらわされた新存在から、われわれが受けとり得るものであって、これこそわれわれの新存在であり、信仰である。信仰は決断である。信仰は教育され得ない。」^(註26) キリスト教教育によって何か教育できるとすれば、それは信仰ではなく、信仰への問いかけである。「すなわち、まず、なぜ人間は不安なのか、不安と自由との関係、および神を知らないものの不幸などについては教えることができる。問いと答えとの関係はきわめて弁証法的であり、教会においてのみ人間の本当の問題が考えられる。なぜなら、答えを知っている教会だけが、人間の本当の問いを提示し得るし、そのような真の問いをつくり得る人格的教育をなし得るからである。」^(註27) 言わば、キリストとしてのイエスの出来事の中に真の答えをもっている教会であるが故に、本当の質問を人びとに発することができるのである。故に、キリスト教教育の教師は、学生にキリストを信じる決断を与えようと思っはならない。むしろ、真の答をもっていて本当の質問ができる教会の中であって、学生に真の答を証しし、決断を促がすことができるような、つまり正しい質問をなし得るような人間形成を自からして行かなければならない。いわば、キリスト教教育の教師というものは、教会の中であって教会を代表して学生に正しい質問をし決断を促がさなければならない。教師はあくまで一個人としてキリスト教教育に従事するものではなく、教会の一員として、教会の真の答を持ち、人間の本当の問いを学生に提示しなければならない。こう

いうわけで、キリスト教教育の教師は当然教会の一員でなければならないことは言を待たないことである。岩村信二はこれを別の言いかたで、「したがって教会教育に従事する教師は、キリストの体の手となり足となって働く者たる自覚を必要とする。彼は決しておのれの光栄のためや、人間に対する単なる興味からこれをなすべきではない。あくまでキリストに栄光を帰し、自らは教会の役者たる自覚をもって教育に従事すべきである。」^(註28) このように見ると、キリスト教教育の教師に権威があるとすれば、それはかれが教会の一員であることにも起因することであろう。

Ⅳ. 説教者としてのキリスト教教育の教師の権威

聖書を読むと、宣教 (Kerygma) と並んで教え (Didache) があることに気づく。人によっては宣教とは未改宗者への伝道であり、教えとはそれと区別されて、すでに回心したキリスト者に向けられた教訓であるという。ドッド (C. H. Dodd) はその代表的な人物であるが、われわれはこのような区別の仕方は妥当ではないと思う。たしかに「教え」の中には、すでに教会に加入した者に対する教育的倫理的なものがあつたことは事実であるが、それを厳密に宣教と区別して考えることはできない。なぜなら、福音書には、同一のイエスのことばがある個所では人間の主体的決断を迫るものとして語られているかと思うと、他方、教会の秩序のために適用されているのが少ない。「聖書の中で、教えはしばしば宣教と並用もしくは等置され、教えがそのまま教訓をあらわすべく用いられている個所も出てくるのである。従って宣教が教えという形で語られた場合のあつたことを否定することができない。」と藤井孝夫は言う。^(註29) 事実、福音の本質から見ても、福音を宣べ伝えることは、キリストの贖いのよき音信を人びとに伝達するのであるが、その際呼びかけの性格をもっており、人びとが信仰をもって生活で応答するよう期待しつづけるのである。つまり、宣教というとき、われわれはただ単にキリストの贖いのよき音信を人びとに伝達するだけに止まらない。言わば、宣教するとき、教えることも予期しているのである。又われわれが教えるとき、その教えというものは、あくまでキリストの贖いのよき音信に立脚するものであり、そのキリストの贖いのよい音信をぬきにしては、聖書の「教え」というものはなりたない。このように宣教にしても教えにしても、それは福音を提示する上に於ける強調点の違いであって、本質的内容には何らの相違もないわけである。故にキリスト教教育に於いて、教師はたえず聖書のいう福音から脱落してはならない。むしろ常に福音の伝達及び呼びかけの2つに専念しないといけない。言い換えると、教師も一説教者であるわけである。教える学生が成人であろうと子どもであろうと、福音の伝達及び呼びかけそのものには何ら変りはない。福音が主体的に聞かれ、理解されなければならないと言って、子どもを排除するのは聖書的ではない。子どもも神の国の一員であり、神の恵みに与るものとして受け入れられるべきである。言わば、われわれは神の恵みが先行することを信じる故にキリスト教教育を肯定しているのであるから、われわれは子どもにイエス・キリストについて教え知らせるのである。この際、宣教と教えは、方法は成人の場合とは違っても、本質的内容に於いては全く同一のものである。

さて、キリスト教教育の教師も説教者であると述べたが、一体説教者にはどういう権威があるのか考えなくてはならない。端的に言って、説教とは、イエス・キリストを宣べ伝えることである。パウロが「わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。」(コリント人への第2の手紙4:5)と言っている通りである。それはあくまで歴史における神の啓示についての音信を語るということに他ならない。そしてこの音信を聞くことによって、信仰が与えられると聖書は言っている。^(註30) こうなると、説教とは説教者自身が神の啓示を宣べ伝える使者としての使命感を持たなくてはならないし、又この使命は性格的には、説教者本人だけがうけたものではなくて、根本的には、神が教会に委ねられたものであるから、説教者が教会の務として、教会の与えられた使命を担って果すわざであると解釈すべきである。このように説教の主体は神であることは言うまでもなく、説教によって説教者は器として神に仕え、説教者の語ることばを通して、人がキリストに出会い、キリストにきくのである。「ルター及びバルトと同様ブルトマンは説教とは人間のことばによる神の言葉であると信じた。つまり説教者をとおして神はわれわれに話しかけ給うことだ。」と R. E. スリース (Ronald E. Sleeth) は言う。^(註31) このように説教は表向きには人間が語るものであるが、根本的には神が語るという権威あるものである。しかし同時に重要なことは、その説教の内容が誰のことばであるかを常に確めなくてはならない。さらに問題なのは、説教とは根本的に神ご自身が語られるものであると述べたが、この際信仰の奇跡が起らなければ、説教が実のりあるものとして機能を果し得ない。つまり、「信仰の奇跡が起る時にのみ、人間の耳が聞き、人間の唇が告げる言葉が神の言となる。」^(註32) わけであり、「信仰の奇跡が起らないかぎり、宣教の主題は生ける真理とはなりえず、したがって応答を呼び起すこともないのである。」^(註33) まさにパウロが言ったように、「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。」(コリント人への第1の手紙1:18) こう見てくると、説教は神が語るという権威あるものには間違いのないけれども、信仰の奇跡なくしては、その権威の行使が不可能となって終る。ここに説教者としての教師は大変困難な立場におかれていることに絶えず気付いていなくてはならない。

最後につけ加えて述べなければならないのは、すでに述べたように福音の宣教というものは、人びとに呼びかけの性格を持っており、人びとが信仰をもって応答するよう期待しつづけるものである。それ故説教というものは福音を生活に結びつけ、われわれの日常生活のすべての実際問題と関連させる。それは、神が歴史の中でなされた救いのみ業を思い起すことによって、聞く人が希望をもって現在に生き、そして将来を迎えられるよう信仰を持つようにすすめるためである。人間が自力ではどうしても自からの悲境から脱出することが不可能であり、イエス・キリストによってのみこのような困境から救い出されるのであるから、教師たるものは、ただ単に学生の罪をきびしく叱責し、ひたすら道徳的生活に励むよう勧告するのは間違いである。罪の問題で苦悩する人間には、神の恵みが唯一の救いであり、解放の道であるからである。

V. イエスの教師的権威から見たキリスト教教育の教師の権威

ウィリアム・バークレー (William Barclay) によると、福音書の中でイエスを教師として表現するのに、三つの名称が使われていると言う。最も普通なのは、ディダスカロス (didaskalos) で、master 或は teacher という意味で、ルカはエピスタテース (epistatēs) という語を使って校長をさし、福音書の記者たちは、ラビ (Rabbi) という語を使用してイエスを「わたしの偉大なるもの」と尊称した。そして以上三つの名称はラビという語によって代表され、福音書をとおしてイエスのすぐれた教師としての姿があらわされているといっている。(註34) マタイ伝の記者は、山上の垂訓を聞いて驚いた群衆が、イエスを批評して「それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられた。」(マタイによる福音書 7 : 28~29) とイエスの教師的姿を特に注意深い目で見ています。さらに、われわれは福音書の中に於いてイエスが大変すばらしい教学法をもって人びとに宣教し教育されたことに注意したい。これはイエスが権威ある教師として尊称された理由には、もともと神のみ子として臨在されたということであると同時に、彼がすばらしい教学法を実演されたということも否定できないということである。言い換えると、イエスの教師としての権威は、すばらしい教学法を使用されたことにも関わりがあるということである。W. バークレー (William Barclay) によると、イエスは次のような8つの教学法を使われた。(註35)

1. 忘れがたい警句を使用された (cf. マタイ 23 : 12; ルカ 18 : 14; マタイ 16 : 26)
2. 思考を刺激する矛盾を用いられた。(cf. マタイ 5 : 1~16; ルカ 6 : 20~26)
3. 生き生きした誇張を使用された。(cf. マタイ 5 : 29~)
4. 心にしみこむユーモアを用いられた。(cf. マタイ 7 : 1~5)
5. 譬えて教えられた。(cf. マタイ 13 : 1~)
6. 帰謬法を用いられた。(cf. マルコ 3 : 23~26)
7. 論理的ジレンマを用いられた。(cf. ヨハネ 8 : 7)
8. 一層有力な理由をもってする議論を用いられた。(cf. マタイ 6 : 30; 7 : 11)

われわれはさらに、イエスが不思議なほどに上手に視聴覚教学法を使用されたことを挙げなければならないと思う。

つまり、イエスは視聴覚教学法を使用して：

1. 群衆の注意を喚起した。(マタイ 12 : 48~50; 21 : 12~13)
2. 神の国の知識を授けた。(マタイ 18 : 2~14; ヨハネ 4 : 6~26)
3. 情緒を刺激した。(マタイ 21 : 6~9)
4. 思考を刺激した。(マタイ 22 : 18~22; ヨハネ 13 : 4~14)
5. 礼拝の雰囲気をつくった。(マタイ 17 : 1~8; 26 : 26~29)

以上のすばらしい教学法を使われたイエスは、世に又とない偉大な教師として人びとの頭に深く印象づけられたのであるが、われわれはさらにもう一つイエスの教学法の最大特色を挙げなければならない。それは、イエスがただ聖書を引用して伝統的な解釈をされたのではなく、むしろ

聖書以上のものを人びとに与えられたということである。例えば、「昔の人々に殺すな、殺す者は裁判を受けねばならないと言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う、兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう。またばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう……。」(マタイによる福音書5：21～22) このほかマタイによる福音書5：27～30；31～32；33～36；38～42；43～48などにもあるように、イエス・キリストは「しかし、わたしはあなたがたに言う」ということばでもって伝統的な聖書解釈から、一段と高い所より神のみ旨を説き明かされたのである。キリスト教教育に於いて、教師は聖書解釈者であると述べたが、聖書はもともとキリスト教教育のためのテキストとして書かれたものではないのだから、聖書解釈者としての教師の困難は察するに余りがある。しかもこのような困難をかかえて責任を果たさねばならないのであるから、教師はなおさら神のことばを聖書の中にある伝説・譬・詩や歌・劇・説教・論文・手紙などから読み取らなければならない。教師によっては、聖書がただキリスト教教育の方向を指し示す程度のものでしかなくなったり、一般の倫理道德の教材見たいになったり、神の救いの恵みを指し示す聖書として使いこなす能力がなく、ただ学生に面白い先生として扱われ、時間をもてあますことでは全く話にならない。今日のキリスト教教育の問題は、教師がどういう教学法のテクニックを持っているかというよりは、むしろ、何を教えようとしているかである。つまり、技術ではなく、その教える内容であり、言い換えれば、教師自身聖書が指し示している人間形成ができるように学生を育てることができる人であるかどうかである。ただ単に聖書の文字解釈者あるいはストーリーテラーで終るようでは、キリスト教教育の目的からはずれたものである。「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。」(マタイによる福音書28：20)と言われたイエス・キリストの真意は、ただ聖書の文字解釈者になれとのことではない。又聖書のストーリーを面白く話すだけでよいと言われたのでもない。イエス・キリストが権威ある教師であると言われたように、権威あるキリスト教教育の教師となるには、やはり、ただの聖書解釈やストーリーを話すのではなく、それ以上のものを持っているものでなくては行けない。この意味で、教師がそれぞれの教団が製定したカリキュラムや編集された教案を利用するときは、以上のような反省が絶えずされねばならない。ただ編集された教案を鵜のみにしては、イエス・キリストにならう権威ある教師にはほど遠いと思われる。このように聖書の扱いかたによって、キリスト教教育の質が大いに違って来るし、内容も変り、あげくのはてはキリスト教教育どころか、非キリスト教教育になりかねない。筆者は最近ある機会に、次のようなショッキングなレポートを受けとった。

「わたしはまだクリスチャンではないが、最近K市のB教会の教会学校のお手伝いをさせられた。ある日曜日の教会学校で、わたしがお手伝いをしていたクラス(小学5・6年)の先生が、クラスの生徒たちに、東海地方に地震がよく発生するので皆が恐ろしがっているが、このようにその地方に地震がよくあるのは、東京なんかの大都市で、多くの男女が結婚もせずに同棲しているからだ、と言ったが、わたしはきいてびっくりした。わたしは、地震がおきるのは、地

層が崩れるためだと聞いているが、クリスチャンの人たちはすべて神さまの仕わざだと考えているようです……………」

その教会学校の教師の非聖書的な解釈も甚だしいと言わねばならない。又かつて、某教団の教会学校教師用の教案の中に、あかちゃんモーセがその姉とオモチャを争い、姉がゆずらないので、モーセが大きな声で泣き出した。お母さんが大変驚き、エジプトの兵士に泣き声を聞かれては一大事とモーセの口をふさいだと書いてあったが、これも別の意味での非聖書的な言い方だと言える。何故なら、聖書（出エジプト記2：1～10）はモーセが家にかくまわれたのはわずか三月であり、もう隠しきれなくなったので、かごの中に入れられてナイル川岸の葦の中におかれたと記しているのに、あかちゃんが生後三ヶ月以内にオモチャのうばい会いができるとは考えられないからである。キリスト教教育の教師は間違いを教えたり、間違った聖書解釈をしたり、自信がないのに、学生の質問に応じたりしてはいないだろうか？教師が真にキリスト教教育の完成を目指すものであるならば、イエス・キリストにならって、聖書にある神のみ旨をはっきりとらえて、自信をもって学生を教え導かねばならない。そして、その際イエス・キリストが使用されたテクニックでもって教えることができれば、最大の効果をおさめることが期待されよう。

結 語：

「教育は教師によって効を奏する。聖書を教えるときに特にそうである。聖書を理解したく、そして聖書が実生活にどう役立つかを、しきりに求めている人に対して効果的な教師になろうとするならば、その人は或る種の資格がぜひ必要である。」とカンス（Francis E. Kearns）は言ったが、^(註36) まさにそのとおりであるが、キリスト教教育に於いては、教師が何を話したというよりは、その教師がどういう信仰者であるかが説得力を持っている。これは、教師の権威というものは、かれが雄弁家であるということによらず、かれ自身がどういう人であるかを言う。しかし、われわれが権威について言うとき、そもそも真の権威者は神であり、神は歴代の預言者を召されてその権威を示されたが、最後に、イエス・キリストによって神御自身の権威を完全にあらわされたということを認めざるを得ない。^(註37) キリスト教教育の教師は、もともと何らの権威がないけれども、神の権威を完全にあらわされたイエス・キリストに召されて、イエス・キリストが命じられたいっさいのことを守るよう教えるというわざにたずさわる故に、権威が与えられたのである。故に、キリスト教教育の教師は、いやがおうでも権威が与えられた客体であるから、権威があるものにふさわしい資格者であらねばならない。言わば、キリストによって与えられた神の権威をどうもたらすかを考え、そしてその権威を行使しなければならない。教育の効力は一般的に言って、教案に負う所10%であるが、その残る90%は教師に負うということは、大かたの賛成するところであるが、キリスト教的人間形成を目標にするキリスト教教育に於いては、なおさらのことであると言っても過言ではない。今日キリスト教教育に関する限り、教会の最大課題は、このような権威を自覚した教師をどう養成しそしてどう再教育するかにあると思う。聖書は、「主のわざを行うことを怠る者はのろわれる。」（エレミヤ書48：10）と書いてある。英文聖書には、「怠

る」を「偽りの」又は「いいかげんな」と言う言葉で訳している。注意すべき警告だと思う。

(註)

- 註1. ミラー原著、柳原 光監訳「関係の教育」P. 67
- 註2. D. Campbell Wyckoff, "Theory and Design of Christian Education Curriculum", P.17
- 註3. 日本基督教団教育委員会編「教会学校教師ハンドブック」P. 2
- 註4. The Religious Education Association, "Religious Education", Vol. 75, Number 3, May-June 1980
- 註5. ミラー原著、柳原 光監訳「関係の教育」P. 365
- 註6. 山内一郎著、「神学とキリスト教教育」P. 78~79
- 註7. 上田光正著、「カール・バルトの人間論」P. 93
- 註8. ibid P. 95
- 註9. ibid P. 139
- 註10. ローマ人への手紙 8 : 1, 14 ; ガラテヤ人への手紙 5 : 25, 16
- 註11. ガラテヤ人への手紙 2 : 20 ; コリント人への第 2 の手紙 10 : 3
- 註12. 小林公一編著、「キリスト教教育の背景」P. 78~79
- 註13. ミラー原著、柳原 光監訳「関係の教育」P. 366
- 註14. Rachel Henderlite 原著、山内一郎訳「教会教育の神学」P. 98~99
- 註15. Hendrick Kraemer 原著、小林信雄訳「宣教の神学」P. 124
- 註16. Rachel Henderlite 原著、山内一郎訳「教会教育の神学」P. 54
- 註17. ibid P. 54
- 註18. ibid P. 54~55
- 註19. Hendrick Kraemer 原著、小林信雄訳「宣教の神学」P. 30
- 註20. 北陸学院短期大学紀要第 9 号 P. 16~31
- 註21. Marvin Taylor, "Foundation for Christian Education in an Era of Change", P. 49~51
- 註22. 小林公一編著、「キリスト教教育の背景」P. 190
- 註23. Lois E. Lebar 原著、島田礼子訳「教会の教育計画と実践」P. 27~28
- 註24. 北陸学院短期大学紀要第 9 号 P. 16~31 「キリスト教教育の主体性について」
- 註25. Rachel Henderlite 原著、山内一郎訳「教会教育の神学」P. 107
- 註26. 小林公一編著、「キリスト教教育の背景」P. 88~89
- 註27. ibid P. 89
- 註28. 日本基督教団教育委員会編「教会学校教師ハンドブック」P. 1
- 註29. 高崎 毅・太田俊雄監修「キリスト教教育講座」Ⅲ P. 18
- 註30. ローマ人への手紙 10 : 17
- 註31. Princeton Theological Seminary, "The Princeton Seminary Bulletin" Vol. II, Number 2, New Series 1979
- 註32. 山内一郎著、「神学とキリスト教教育」P. 95
- 註33. ibid P. 96
- 註34. William Barclay 原著、大島良雄訳「イエスの生涯」Ⅰ P. 144
- 註35. ibid P. 149~157
- 註36. "The Interpreter's One-Volume Commentary on the Bible", P. 1265
- 註37. Kendig Brubaker Cully, "The Westminster Dictionary of Christian Education", P. 42

参考文献：

Barclay, William 原著、大島良雄訳「イエスの生涯」Ⅰ、新教出版社、1966
Cully, Kendig Brubaker 著 "The Westminster Dictionary of Christian Education", The

- Westminster Press, 1963
- Henderlite, Rachel 原著、山内一郎訳「教会教育の神学」、日本基督教団出版局、1968
- Hunter, David R. 著 “Christian Education as Engagement”, The Seabury Press, 1963
- 小林公一編著「キリスト教教育の背景」、ヨルダン社、1979
- Kraemer, Hendrick 原著、小林信雄訳「宣教の神学」、新教出版社、1960
- Lebar, Lois E. 原著、島田礼子訳「教会の教育計画と実践」、いのちのことば社、1976
- Miller, Randolph C. 原著、安村三郎訳「聖書神学とキリスト教教育」、日本基督教団出版部、1962
- Miller, Randolph C. 原著、柳原 光監訳「関係の教育」、新教出版社、1971
- 日本基督教団教育委員会編「教会学校教師ハンドブック」、日本基督教団出版部、昭和32年発行
- Princeton Theological Seminary, “The Princeton Seminary Bulletin”, Vol. II, Number 2, New Series 1979
- Princeton Theological Seminary, “The Princeton Seminary Bulletin”, Vol. II, Number 3, New Series 1979
- The Religious Education Association, “Religious Education”, Volume 75, Number 1, January-February 1980
- The Religious Education Association, “Religious Education”, Volume 75, Number 3, May-June 1980
- 佐藤敏夫・高崎 毅共著「現代と教会教育」、日本基督教団出版部、1966
- 高崎毅・太田俊雄監修「キリスト教教育講座」I、II、III、新教出版社、1958
- Taylor, Marvin, “Foundation for Christian Education in an Era of Change”, Abingdon Press, 1976
- “The Interpreter’s One-Volume Commentary on the Bible”, Abingdon Press, 1971
- 上田光正著「カール・バルトの人間論」、日本基督教団出版局、1977
- Wyckoff, D. Campbell “Theory and Design of Christian Education Curriculum”, The Westminster Press, 1961
- 山内一郎著「神学とキリスト教教育」、日本基督教団出版局、1973